［書評］

毎熊浩一　著
『ギリギリ公務員　福間敏』
（ハーベスト出版，2024年８月刊）

藤本晴久（島根大学法文学部准教授）

はじめに

島根県斐川町（現・出雲市）は，県内でも際立った製造業集積地として知られ，出雲村田製作所や島根富士通をはじめとする企業の工場群が立地している。当時人口３万人に満たない町が，なぜ県内一の産業基盤を築くことができたのか――その背景には，一人の役場職員による企業誘致と，地元中小企業を育てる「内発型産業振興」の実践があった。本書『ギリギリ公務員　福間敏』は，その実践の意義を多面的に描き出したものである。

本書の主人公である福間敏氏は，1980年代から90年代半ばにかけて20社を超える企業誘致や新会社の設立に関与し，斐川町の産業構造や地域経済に大きな影響を与えた。しかし，彼の真価は単なる「企業誘致の成功」にとどまらない。誘致活動を通じて，地元中小企業の学び・連携・人材育成へとつなげ，地域企業の底力を引き上げようとした点にこそ特徴がある。県外から企業を呼び込むだけでなく，地域内部で中小企業を育てる仕組みの構築を目指した福間の取組みは，内発的発展の観点から見ても，現代の地域産業政策が直面する課題に多くの示唆を与えている。

こうした意義を踏まえつつ，本書は福間の軌跡を「異人」という概念を手がかりに描き出している。著者・毎熊浩一氏は，福間を単なる「スーパー公務員」ではなく，複数の集団や文化の境界に位置づく「マージナルマン」として理解する。この境界性は，外部と内部をつなぐ媒介者としての福間の実践を説明する鍵である。そして本書全体を通読すると，企業誘致や内発型産業振興，若手経営者の育成といった福間の成果は，実はこうした実践の根底にある「地域と人に誠実であろうとする姿勢」から生まれたものであることが理解できる。

Ⅰ．本書の構成と概要

本書は，福間敏の行政人生を三つの時期に区分し，彼の実践の変遷を軸として論じている。すなわち，①1980年代を中心とする企業誘致期，②1990年代半ば以降2000年代初頭にかけての内発型産業振興期，③島根県庁職員として官民の枠を越え若手育成に注力した時期である。章構成は以下の通りである。

プロローグ　島根のコロンボ
第１章　誘致の神様―斐川町「企業誘致」略史
第２章　燃えさせる人―「内発型産業振興」顛末記
第３章　島根県庁―分かれる評価
第４章　雲州志士会―若者へのバトン　福間を慕う人々
第５章　学生との対話―現代公務員・若者論
エピローグ　「異人論」からみる福間

第１章では，福間が斐川町役場職員として企業誘致の最前線に立った姿が描かれる。当時の斐川町は農業中心で産業基盤は脆弱であったが，福間は「企業誘致，産業振興がなぜ必要かと言うと，地域の若者のためですわ」という信念を基に，電話一本で企業にアポイントを取り，陳情のために東京・霞が関へ何度も足を運び，地図を広げて自ら現地を案内し，立地後のアフターサービスまで伴走した。こうした活動を通じて，企業誘致に成功した斐川町での具体的な企業誘致プロセスが丁寧に描写されている。

第２章では，企業誘致が進む中で福間が「内発型産業振興」の必要性を感じ，地元中小企業の企業力を高める方向へ舵を切っていく過程が示される。特に，中小企業の技術力向上が不可欠との思いから，異業種交流会の組織化，進出企業との連携強化，貸工場や起業家支援センターの整備，「プロジェクトＫ（斐川版“下町ボブスレー”）」の推進などが展開された。これらの取り組みは，地元中小企業同士のネットワーク形成や経営者の意識変容を促し，企業誘致の多様な影響が地域に波及したことが描かれている。

第３章は，福間が島根県庁企業立地課参与として活動した時期を扱う。与えられた枠内での行動が求められる行政組織と，枠に収まりきらない福間の実践の間には乖離があり，福間自身の葛藤や苦悩が描かれている。他方で，この時期は著者が「福間の人生最後の遺産」と評する雲州志士会の萌芽が育まれたことも強調される。

第４章では，「雲州志士会」の活動が中心的に取り上げられる。同会は，若手経営者が地域の未来を議論し，互いの強みを活かしながら成長するためのネットワークである。ここには若い経営者を中心に，大学教授，医者，行政，支援機関など200名以上が集い，主体的に学び，連携する場が形成されていた。地域の未来を切り拓く鍵は人材育成にあるという福間の信念が，この活動の根幹を成しており，その精神は雲州志士会のメンバーによって今日へと受け継がれている。

第５章では，大学教育の現場において福間の生き方を現代の若者がどのように受け止めているのかが紹介される。「福間さんは，リスペクトするが，憧れはしない」といった学生の反応は，公共性・地域貢献・キャリア意識・重責を避けたがる性向などの間で複雑に揺れ動く若者の姿を象徴しており，福間の実践が今日の若者にとっても重要なメッセージとなり得ることが指摘される。

さらに，第４章と第５章の間には福間を慕う人物の証言が収録されている。野津積（モルツウェル株式会社），吉川朋実（株式会社奥出雲社中），松井保（株式会社日本ワイドコミュニケーションズ），田部長右衛門（田部家第二十五代当主），前田泰宏（元中小企業庁長官）らの言葉から，福間の実践が行政や公務員の枠を越え，次世代の地域を担う若手経営者たちに強い影響を与えたことが読み取れる。

エピローグでは，著者が福間敏という人物やその実践の在り方を「異人（マージナルマン）」という視点から捉え直し，その本質を「成果」ではなく「姿勢」に見出している。福間は，公務員でありながら組織の主流に安住せず，官と民の境界という周縁に立ち続けた存在であった。その立場は創造性という「光」と，孤立や葛藤という「影」を同時に生んだが，常に自らの内にある「異人」に忠実であろうとし，外部評価ではなく内なる基準に従って職務に向き合い続けた。著者はこの在り方を「誠実さ」と呼び，内なる異人に耳を傾け続ける姿勢こそが，地域や人を動かした最も根源的な力であったと結論づけている。

Ⅱ．本書の意義と若干のコメント

本書では，福間が繰り返し示してきた「地域が自立するためには経済の豊かさが必要であり，その原動力は地域の中小企業であり，そして人である」という考え方が紹介されている。この

メッセージは抽象的な理念ではなく，豊富な現場経験に裏打ちされた信念であり，地域経済の活性化には制度や補助金だけでなく，人々の行動，学習，そしてネットワーク形成が不可欠であることを示している。本書が，地域経済の発展メカニズムを抽象的理論ではなく具体的実践の積み重ねとして描き出している点は大きな価値を有しており，特に以下の示唆は重要である。

第一は，中小企業振興の視点である。

斐川町の企業誘致は雇用や税収をもたらした一方で，従来型の外来型開発のみでは地域経済の発展に限界があることを福間自身が早くから認識していた。そこで彼は，企業誘致を「終点」ではなく「出発点」と位置づけ，地元中小企業の技術力向上，若手経営者の育成，ネットワークの形成へと政策軸を転換した。こうした内発型の産業振興への舵取りは，従来の立地政策中心の産業政策とは異なる地平を切り開くものであり，地場の中小企業振興の観点からも重要な示唆を与えている。

第二は，地域レベルの産業経済振興における自治体の主体性である。

日本の地方自治体はこれまで，中小企業基本法の改正や地方分権改革が本格化する2000年代前半頃まで，国の産業立地政策や地域開発政策を実施する役割を担い，国が示す制度や補助金の運用に重点を置きがちであった。しかし，斐川町における福間の実践は，現場の知恵や意思，企業関係者との信頼関係，地域資源の丁寧な把握といった「地域の個性」や「関係的資源」を基盤として，自治体自身が経済政策を主体的に構想し得ることを示している。本書に描かれた諸事実は，「地方自治体はどこまで地域産業経済の設計主体となり得るのか」という根源的な問いを，読者に強く投げかけている。

第三は，公務員像の再定義である。

著者が提示する「異人」あるいは「マージナルマン」という概念は，現代の地方行政の在り方や公務員像を読み解くための有効な視角である。福間は行政の「内部」と「外部」，制度と現場，官と民の境界に立ち続けた存在であった。官僚的組織が安定性と規範的行動を重視するのに対し，境界に立つ者はしばしば創造的な役割を担う。本書は，そうした「複数の集団や役割，さらにはアイデンティティが重なり合う位置に身を置く公務員」が新たな関係性を編みなおし，地域社会に創造的変化をもたらし得ることを，説得力をもって示している。

さらに，本書の教育的意義も見逃せない。

大学教育において福間の実践や生き方を紹介することは，ひとつの公務員像の提示やキャリア教育にとどまらず，公共性，地域への関与と参加，そして働くことの意味を学生自身に問い返す契機となる。

福間の姿は，「こうあるべき公務員像」を示すものというよりも，「自分はどのように地域と関わり，どのように働きたいのか」を考えさせる存在として受け止められている。若者の都市志向が強まっていると言われる今日においても，本書は，福間の働き方や地域との関わりをひとつの実践として丁寧に描きつつ，それを唯一のロールモデルとして提示するのではなく，読者一人ひとりが自身の進路や生き方を主体的に考えるための視座を与えている。

おわりに

本書は，福間の実践を通して，中小企業振興や地域経済振興を「人間関係のネットワーク」として捉え直す視点を提供するとともに，民と官をつなぐ公共人としての新たな公務員像を提示している。福間敏の軌跡は，「地方創生」がスローガンとして消費されがちな現代において，「地域を動かすのは制度ではなく，地場の中小企業であり，人である」という本質的なメッセージを改めて私たちに突きつけている。

こうしたメッセージが深い説得力をもって伝わる背景には，福間を慕う多くの人々の熱意と，それに応えるように事実を多面的かつ丹念に読み解いた著者の姿勢がある。本書は，一人の公

務員の足跡を記した記録にとどまらず，希望ある地域社会を創りたいと願う人々に必要な視野と勇気を与えてくれる。中小企業，地域経済や地方行政に関わる実務家，経営者，研究者，公務員はもちろんのこと，次代を担う学生や若者にも，ぜひ手に取っていただきたい一冊である。